



子ども大学学生新聞

第45号
子ども大学
かわごえ新聞部

アフリカってどんなところ？

岡倉登志先生「人種差別のない世界を築こう」

二〇一八年三月十八日(日)午後一時四十五分から尚美学園大学教室棟北オーデトリウムで、大東文化大学名誉教授の岡倉登志(たかし)先生による「アフリカを知る」という授業がありました。今年度最後の授業ということもあり、四年生五十二人、五年生三十九人、六年生四十二人合計一三三三人の学生が出席しました。

一時間目は、「アフリカについて」から始まり、黒人と白人で差別があったことを学びました。マダガスカルにはインドネシアからの移民が多いそうです。日本との交流は、江戸時代からエチオピアとありま



ありました。アフリカは「人類のふるさと」と呼ばれています。紛争などが起きたときの、国連軍のあ

り方が問題だそうです。

次に、政治についてお話されました。日本は、政治を行っている三分の一が女性です。ですが、先進国としては政治参加の男女平等が遅れているとのこと。アフリカではサッカーが人気です。

きょうの入学式 新入生150人

みなさん、入学おめでとうございます。二〇一八年度の入学者は一五〇人(四年生六三人、五年生四九人、六年生三十八人)です。入学式は午後一時から新井悠希君(大東西小6年)が司会、はじめに森下遥稀君(南古谷小6年)が新入生歓迎のあいさつをします。そのあと注意事項などのオリエンテーションがあり、二時から東京国際大学人間社会学部教授・碓井外幸(うすい・そとゆき)先生による授業「体の成長と骨の役割」があります。授業終了後、四時から集合写真をとります。二回目の授業は七月二十八日(土)です。一年間、わくわくする楽しい授業を受けましょう。

た、エリザベス二世のお父さんが亡くなった時は、太鼓言葉で伝えました。なぜ太鼓言葉か、文字がないからです。アフリカ言語のスワヒリ語は、五、六ヶ国で使われているそうです。

今現在、アフリカには五五の国があります。日本とは反対に、たくさんの子どもがいます。アフリカについて、いろいろ知ることができて良かったです。

(小畑美宙記者 高階西小6年)

「人種差別」は「隔離」

二時間目は「南アフリカの人種差別と解放」に焦点を当てて授業が進められました。アパルトヘイト(Apartheid)はオランダ語を中心としたアフリカーンス語で「隔離」(かくり)を意味し、アパートと同じ語源だそうです。

出入り口が黒人と白人で違ふこと、トイレや公園のベンチ、職業、病院、スポーツまで差別されているのです。

隔離は差別よりも大きく、アフリカインディアン(インド人の居住地)に近く、ユダヤ人や日本人の強制収容所よりも広範囲であると知り驚きました。授業の中で見せて下さった映像で、それらのことをより詳しく知ることが出来ました。アフリカの人たちの差別を無くす運動が進められていることが、先生の授業を聞いて良く分かりました。

一日でも早く戦争や差別の無い平和な世の中になり、世界中の人たちが安心して過ごせる時代が来るといいな、と思いました。(高階西小学校6年 堀颯斗)

☆岡倉先生にインタビュー

Q なぜアフリカに奴隷(どれい)が多かったのですか。

A アフリカには、力の弱い人が多かったからです。その力の弱い人々を、力の強いが奴隷商人に売ったり、こき使ったりしたのです。

Q なぜ人種差別をするのですか。

A みんな自分中心と思ひ込み、自分が生き残ろうとするからです。弱い人々をどんどん落とすし、自分が上に立ちたいという欲望が人間の中にあるんだと思います。

(田本 周記者 武蔵野小6年)

Q アフリカに興味を持ったのはいつですか。

A 中学生になってからです。大学教授の父がアフリカに関係していたこともあり、東京で会議があったとき、自宅にアフリカの人 came たりしていたので、アフリカに関心を持つようになりました。

Q アフリカの音楽でよく使われる楽器は何ですか。

A 全体的に見ると太鼓です。大小さまざまなものがあります。またギターのような弦楽器も使われています。(藤山七海記者 霞ヶ関南小6年)

Q ティンカティンカの絵の中で好きなところはどこですか。

A 色合いが明るくて、アフリカが一番明るかったことを表しているところ(奈村晴冬記者 高階西小6年)です。

☆記者の授業感想

子どもがたくさんいるアフリカ

◇小畑美宙記者 高階西小6年

私は、岡倉登志先生のお話を聞いてアフリカって良いなと思うことがありました。一つ目は、日本は少子高齢化が進ん

でいて子どもが少なくなってきたに、それとは反対にアフリカでは子どもがたくさんいると言っていたことです。二つ目は、太鼓言葉です。日本には、そんな言葉がないから面白いと思いました。**人口はくはくでたくさんいる**

◇吉田真奈記者 坂戸市勝呂小5年
今回の授業で、アフリカが人口はくはくで、人がたくさんいることを初めて知りました。アフリカには、そこまでたくさん人が住んでいるとは思っていませんでした。

太鼓をたいて知らせる太鼓言葉

◇秋山花那記者 鶴ヶ島二小6年
岡倉先生の話を聞き、おどろいたことがあります。それは、アフリカでは、太鼓をたたいて言葉を伝えていたということです。太鼓をたたいて言葉を伝えられるのかな?と不思議に思いました。けれど世界の音楽でも、思いや感情を言葉で言わなくても伝わることもあるので、アフリカの人たちは、すごいと思いました。

不平等な発展で民族対立が絶えない

◇河原美佐子記者 中央小4年
アフリカ五五か国の多くは、多民族・多言語構成で、各民族の生業、生活文化様式は多様と知り、お互い理解しあえるのかと疑問に感じました。鉱物資源に恵まれていても不平等な分配や、地域間の不平等な発展のせいで民族対立が絶えないのは残念に思いました。21世紀のアフリカの課題は平等な国民国家を建設していくことです。もつとアフリカを知るために、いつか岡倉先生の本を読めるといいなあと思いました。

◇上杉 環記者 高階小6年 (親子で書きました)

私は今回の授業を受けて、先生が言っていた「(日本の)国歌は正しくない」ということにおどろきました。確かに憲法では「国民主権」と言っているのに、「君が代」は天皇陛下を中心になつていて、おかしいと思いました。これまでは「国歌は正しくない」なんて考えたこともなかったから、すごくびっくりしました。

人種差別が起きる原因を知った

◇新井悠希記者 大東西小5年
授業で印象的だったのは人種差別です。たとえばアメリカです。アメリカではレストランやトイレなどでも黒人と白人で別れて入るのです。どうして差別がおきるかというと、自分が中心だと思いつつ分とちがう人を批判するからです。

ぼくは、アフリカという言葉ならよく

◇森下遥稀記者 南上谷小5年
聞くのですが、くわしくは知りませんでした。ですが、多種多様な民族(アラブ人、黒人、白人など)の間に差別があること知ることができて、よかったです。またもう一度、子ども大学に入ろうと思っているの、知らないことを教えてもらい、興味を持てるようにしようかと思っています。

☆修了式☆
皆勤賞は31人



授業のあと、修了式があり、修了生一八九人を代表して川越西小四年生の塩野真君が遠藤克哉学長から修了証を受け取りました。塩野君は「子ども大学でたくさん学べて良かったです」と言っていました。皆勤賞は四年生九名、五年生一四名、六年生八

名、合計二二名が賞状を受け取りました。授業の感想文が良かった学生を表彰する「はなまる賞」は四年生三名、五年生五名、六年生三名、合計一一名が賞状を受け取りました。



功労賞は入学式で司会を務めてくれた田本周君(武蔵野小6年)ら六年生三名に贈

「英語と友だちになろう」

遠藤学長あいさつ



修了式で遠藤克哉学長があいさつ、小学校を卒業して中学校に行く六年生に向けて「これからはグローバル化が進み、英語をツール(道具)として日常的に使用する機会が増えていきます。だから英語を嫌いにしないで友だちになるようにがんばってください」と話しました。また、「何事にも興味を持ち、「なぜ?」「どうして?」と思う気持ちを大切に、何事にも挑戦する『チャレンジ精神』を持ち続けることを忘れないでほしい」と贈る言葉を述べました。(堤彩夏シニア記者 星野学園高校1年)

☆お礼の言葉

◇答えない問題に出会った
田本 周記者 武蔵野小6年
ぼくは四年生の時から三年間、子ども

大学にお世話になりました。子ども大学のおかげで、ぼくは他の小学校の友達と出会い、子ども大学でなければ受けることのできない授業を受けることができました。また、新聞部で記事を書いたり、特別授業で英会話を習ったり、いろんな体験をしました。

小学校では、答えのある問題について勉強しますが、子ども大学では、例えば「戦争はどうして起るのか」「音と音楽は何が違うのか」といった答えのない問題について考えました。授業を通して、世界には、何が答えなのかわからない、研究・議論しなければならぬ問題がたくさんあることがわかりました。

教えに来てくださった先生方、授業を支えてくださったスタッフの方々、毎回送迎してくださった保護者の方々、会場を貸してくださった大学関係者の皆さん本当にありがとうございました。

たくさんの方々との協力がなければ、子ども大学はできませんでした。ですから、子ども大学に関わるみなさんにお礼を申し上げたいです。ぼくはこの三年間、子ども大学で学んで来た知識を生かして、中学でも勉強にもつと励んでいきたいと思えます。

●おこわり

原稿を書いた記者の学校名・学年は三月の修了式のときのものです。

新聞は今号で休刊します

子ども大学学生新聞は担当スタッフの都合により今号をもって休刊させていただきます。ご愛読ありがとうございます。新聞部のみなさん、ご苦労さまでした。